

# 円山派、近代へ

応挙から興った円山派は、幕末にかけてその裾野を広げていった。流派の末端では師の絵手本を写すだけの形骸化の弊も生じたが、応挙の直系に連なる画家たちは対象の写生を重視し、その真をとらえようとしたり開祖応挙の理念をしつかりと受け継いでいた。そして、他に先駆けて西洋的な遠近法や陰影法をも取り入れた応挙の近代的感覚は、維新後の新たな流れにも円山派が柔軟に対応することを可能にした。こうして時代が明治に移っても、京都画壇の中心はやはり円山派であり、中でも幸野楳嶺や森寛齋は、明治十三年の京都府画学校の設立や京都在住画家の集まりであった如雲社を運営するなどして、画壇全体を牽引する役割を果たした。さらに彼らは門弟の育成にも力を入れ、楳嶺門からは竹内栖鳳、寛齋のもとからは山元春拳といった、明治後半から大正、昭和にかけて活躍する画家が登場した。さらに京都から東京へ活動の拠点を移す円山派も登場する。とりわけ川端玉章は東京美術学校の教授となり、東京における近代円山派の普及に大きく貢献した。東西両画壇の応挙の末裔たちは、帝室技芸員にも次々と任命され、明治宮殿や各離宮を飾る数多くの作品を描くこととなったのである。



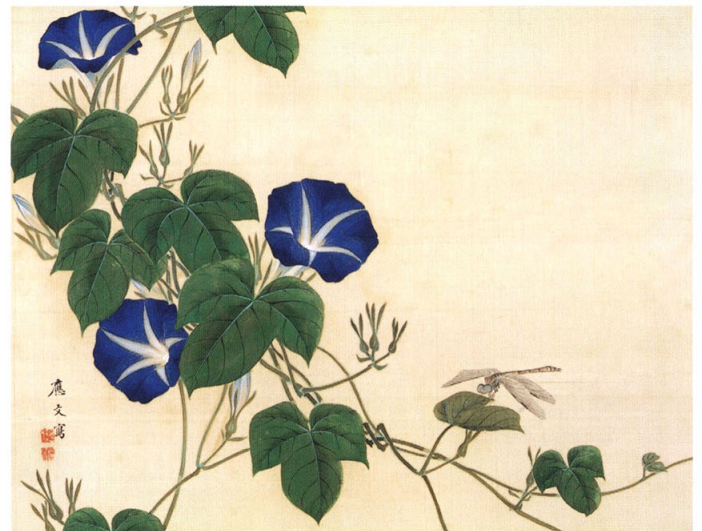
## 10 京都府画学校校員画帖

森寛齋、国井応文ほか 一帖

絹本着色  
明治十五年（一八八二）  
本紙各三二・五×四一・六



森寛齋 頼光入山図



国井応文 薺花蜻蛉図

明治十三年（一八八〇）、日本画が扱う絵画専門学校としては日本初となる京都府画学校が、京都御苑内の准后御里御殿を仮校舎として開校された。この画学校設立は、南画の大家田能村直入の働きかけとともに、幸野楳嶺を中心に望月玉泉、久保田米僊、巨勢小石らが京都府知事に陳情したことが大きなきっかけとなった。

画学校の大きな特徴としては、学科が東宗、西宗、北宗、南宗と四つに分かれていたことで、円山派、土佐派





森川曾文 修学秋景図



村瀬玉田 長柄鶴飼図

望月派、原派など江戸時代から続く流派は東宗、塩川文麟一門や鈴木百年一門などの新興流派は北宗に分類された他、洋画は西宗、南画は南宗に分類された。

さて、本画帖は画学校の摂理(校長)、教員、そして教員候補となる出仕のあわせて六十名の画家(在籍者が田村宗立一人であった西宗をのぞく)の手になる画帖である。いくつかの図に入れられた年記から明治十五年の制作であることが判明し、おそらくは設立して間もない画学校が学校をあげて制作し、献上したものと思われる。明治前期の京都画壇の、主立った画家が一覧できるという意味で非常に貴重な作品であり、その中には円山派の画家も多く含まれている。各図に目を向けると、円山派に南画の妙味を加えたと評される森寛斎が、峻険な岩山を擦れた皴で巧みに描き出し、国井応文は円山派の正統らしく非常に写實的に朝顔を描写するなど、一面一面は小ぶりながらそれぞれの画家の特徴がよく表れている。他にも応挙にならった原在中から続く原派の原在泉や、呉春の孫弟子にあたる塩川文麟門下の鈴木瑞彦や羽田月洲などの絵も認められ、円山派の系譜に連なる画家がいかに画学校に多く出入りしていたかが分かる。また、村瀬玉田や野村文挙などこの後東京へ移住していく円山派の画家の絵も含まれており、そうした画家の京都時代の作例としても興味深い。

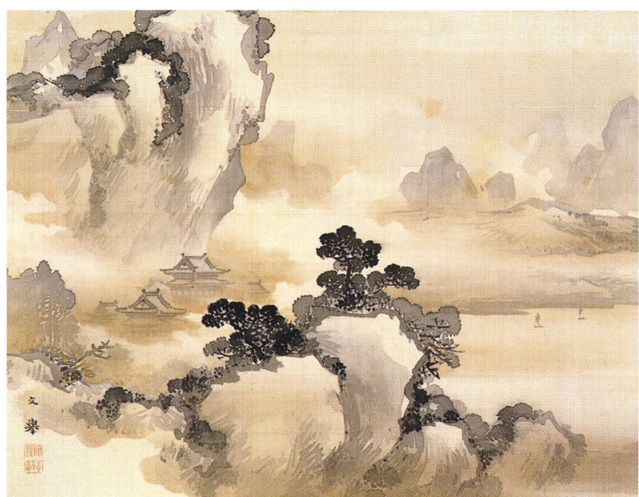




前川文嶺 躑躅香魚図



原在泉 大堰赤岩図



野村文挙 山楼眺望図



幸野樸嶺 苑檐雨余図



鈴木瑞彦 嵐山春景図



羽田月洲 三井春暁図

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections